

ID-Link を活用した訪問栄養食事指導の自験例の報告

○手塚波子（テヅカ ナミコ）1）、大野秀棋2）、塩谷さち子3）、杉原信4）、鍛冶恭介5）、高橋雅人6）、小林正洋7）、新澤祥恵8）、羽柴厚9）

1）金沢栄養ケアセンター 2）同センター長、金沢市医師会 3）金沢栄養ケアセンター 4）金沢市医師会 5）同副会長 6）同事務局 7）同事務局 8）石川県栄養士会会長 9）金沢市医師会会長

【はじめに】栄養ケア・ステーションは、2008年9月1日に日本栄養士会によって開設された、栄養士・管理栄養士のための活動拠点である。その後、各都道府県毎に設置されているが、残念ながら栄養士の在宅医療への関わりはあまり進んでいない。また管理栄養士が行う訪問栄養食事指導は、月2回が上限であることから、情報共有のあり方も課題となっている。金沢市では2019年10月にいしかわ栄養ケア・ステーションのサテライト施設として、「金沢栄養ケアセンター（以下、当センター）」が、金沢市と金沢市医師会の協力により金沢健康福祉財団内に開設された。今回、ID-Link を用いて訪問栄養食事指導を行う機会を得たので報告する。

【方法】金沢市医師会が運営するハートネットホスピタル（以下、HNN）を利用し、管理栄養士による在宅医療での情報共有について検証した。利用環境では、当センターの iPad を利用できた2ヶ月間は自宅で使用し、その他の期間は県栄養士会事務局の固定端末を利用した。閲覧は訪問前日までに実施し、報告については文書の送付の他、同書類の HNN への登録とノート欄へのコメント記載で行なった。

【結果】2019年11月末から2020年9月までの間に10名の患者に利用した。平均年齢は86±6歳、男性3名、女性7名で、主な病態は嚥下障害に伴う低栄養状態であり、依頼目的は概ね摂取量の評価、食形態の工夫と栄養改善等であった。訪問前に HNN を参照することで療養経過の確認が容易であった他、病状の急変時には計画を練り直すことが可能であり、病態に応じた食事や栄養補助食品の提供や摂取方法を関係者に周知する上でも有用であった。貸出端末が手元にある場合は、訪問日以外でも閲覧・情報提供がより頻回に行えた。

【考察】今回、訪問栄養食事指導において、HNN を利用することで質の高い他職種連携が行えた。訪問頻度が僅かな栄養士にとって重要な連携手段になると思われた。今回はコロナ禍の影響は少なかったが、訪問頻度を抑えながら連携の質を高めることはコロナ禍での対応にも活かせるものと思われる。課題としては、端末などの環境整備と、栄養士がより有効に医療 ICT を利用するための教育環境の整備が挙げられる。今後、国の施策において、医療機関からの依頼で栄養ケア・ステーションの管理栄養士が訪問栄養食事指導を行えるようになることから、今回の先駆的な取り組みは重要と考える。